

モグロビン 9 g に改善するまで、31日要した。

症例 4 : 70才男性。貧血を主訴に入院。昭和60年に胃全摘術の既往あり。入院時ヘモグロビン 6 g/dl, ビタミン B12 1000 mg 投与しヘモグロビン 9 g に改善するまで、21日要した。

これらの症例で改善が遅れた原因を考察した。鉄欠乏を合併していた症例が 1 例あった。腎不全症例はなかった。貧血改善後、骨髓異形成症候群 (MDS) と診断した症例が 2 例あり、MDS の疑いありとして経過を観ている症例が 2 例あった。ビタミン B12 欠乏性貧血は、ビタミン B12 投与により速やかに改善することが知られているが、他に貧血の原因となる疾患を合併することがあり、特に高齢者が患者の場合、他の血液疾患のスクリーニングも必要と考えられた。

第10回新潟周産母子研究会学術講演会

日 時 平成12年 3月18日 (土)  
午後 1 時30分より  
会 場 新潟県医師会館大講堂

1) 当科における出生前診断について

幡谷 功・西村 紀夫 (長岡中央総合病院) 産婦人科  
加藤 政美

医学の進歩に伴い、出生以前に診断可能な胎児疾患、異常が増加している。一方、少産傾向や母体の高齢化に伴い、胎児に関する情報に関心をもつ妊婦も少なくない。出生前診断の目的は、胎児期の診断により出生時より疾患をもつ新生児を集中的に管理する事が可能となることで、患児を健康な新生児と同様に生活できるよう加療することにある。しかし、治療不可能な疾患の場合、妊娠継続の可否まで判断せねばならず、生命倫理的な検討が必要な領域でもある。今回、長岡中央総合病院での平成 8 年～平成11年の 4 年間に、当科において主に超音波を使用したスクリーニングにて出生前診断を行った症例について、診断時の妊娠週数、診断名、転帰などの項目を中心に検討を加え、当科での出生前診断の現況につき報告する。また、当科では産婦人科の特殊外来として遺伝相談外来を開設しており、同外来で行った羊水穿刺による染色体分析の結果についても併せて報告する。

2) 既往帝王切開の経陰分娩に関する検討

— 1 例の子宮破裂例を含めて —

須藤 寛人・網倉 貴之  
萬歳 淳一・安田 雅子 (長岡赤十字病院)  
安達 茂實・児玉 省二 (産婦人科)

既往帝王切開者の今回分娩にあたって、分娩様式をどのようにするかは重要な事柄である。米国においては、かつては「一度帝王切開を受けたものは引き続き妊娠は全て帝王切開」であったが、最近では「Vaginal Birth After Cesarean Section (VBAC)」の考え方が主流になったようである。この時に一番問題になるのは子宮破裂に関する事項である。

私たちは、最近、分娩直後に認められた子宮破裂例を経験したので、過去 5 年間の既往帝王切開の取り扱い方を後方視的に見直してみたのでその結果を報告した。

1. 平成 7—11 年の既往帝王切開妊婦は 196 人であった。今回早産のため反復帝王切開 (5 例, 2.6%), 予定正期帝王切開 (91 例, 46.5%), 37 週以降になって陣痛のない状態で切迫子宮破裂のため緊急帝王切開 (4 例, 2.0%) であった。

2. 試験分娩例は 96 例 (49.0%) であったが、このうち、切迫子宮破裂の診断をした 2 例を含んだ、12 例 (6.0%) が最終的に帝王切開になった。

3. すなわち、VBAC 施行率は  $96/196=49.2\%$ 、VBAC 成功率は  $84/96=87.5\%$ 、VBAC 率は  $84/196=42.9\%$  であった。

4. 子宮破裂が短時間分娩終了直後に発見された 1 例に遭遇した。緊急子宮全摘を行った。母児ともに経過良好であった。切迫子宮破裂の診断で帝王切開を行った 6 例に子宮破裂や離断は認められなかった。従って子宮破裂の頻度は  $1/196=0.5\%$  であり、諸家の報告に近似していた。

3) 妊娠中に発症した多発性硬化症の一例

鈴木 美奈・東野 昌彦  
安達 博・佐藤 孝明  
山本 泰明・倉林 工 (新潟大学)  
高桑 好一・田中 憲一 (産婦人科)  
関塚 直人 (関塚医院)  
渋谷 伸一 (県立坂町病院) 産婦人科

多発性硬化症は原因不明の炎症性脱髄疾患の一つで視神経、脊髄、大脳白質に多巣性に生じ、時間的空間的多発性が特徴的である。頻度は 10 万人に 1 ~ 3.9 人と非常